広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	パイグニア ： 魔術と化学マジック
Author(s)	前野, 弘志
Citation	史学研究 , 309 : 1 - 28
Issue Date	2021-07-19
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055712
Right	
Relation	

パイグニア
—魔術と化学マジック—

前野　弘志

1．はじめに

「パイグニア」παίγνια（単数形 παίγνιον）という語の辞書的な意味は「遊び、楽しみ、玩具、たわいない踊り、滑稽なまね、冗談、悪ふざけ、ペテン師、戯れ歌」など様々あるが[(1)]、基本的な意味は「おもちゃ」である。後者の用例は、プラトン『法律』の一節、〈人間は神々の「おもちゃ」παίγνιον として作られたのだから、競技、儀式、犠牲、歌や踊りで神々を喜ばせねばならず、そうすることによって神々の加護を得ることができる〉（VII.803c; I.644d）の中に見られる[(2)]。また「パイグニオン」は文学ジャンルを指す用語としても用いられた。散文作品、猥褻な短編小説、喜劇作品、お世辞に満ちた短い詩、田園詩など、「真面目」の反対の「滑稽」という要素を共通して持つ短い雑多な書き物を指した[(3)]。一方、魔術文書にも「パイグニア」と呼ばれるものが含まれる。ドイツ語では Scherze（*PGM*, Bd.II, S.56）「冗談、ふざけ」[(4)]、英語では gimmicks（*GMP*, p.151）「〔手品師・野師などの〕たね、仕掛け（trick）、策略」[(5)]などと訳される。『ギリシア語魔術パピルス』に集成された文書を内容に従って５分類した Jacco Dieleman は、①「知ること」knowledge、②「他人を思い通りに動かすこと」control over others、③「護身」protection、④「癒し」healing に加えて、⑤「その他」として唯一「パイグニア」を位置づけ、それを「滑稽な魔術の方法」jocular recipes と訳し、「取るに足らない悪戯のトリック」frivolous and naughty tricks に関する個々バラバラな言い伝えの残存物と定義した[(6)]。

確かに「パイグニア」は、魔術というよりは饗宴の余興の類であり、書くべき「印」もなく、唱えるべき「呪文」も稀にしかない。あるのは酔客を驚かせたり笑わせたりする「手品」の方法や「話題」である。この種の文書は『ギリシア語魔術パピルス』の中では２例しか存在しない（*PGM* VII.167-185と *PGM* XIb. 1-5）。『ギリシア語魔術パピルス』の本質を理解するためには、その典型的な文書を分析することが定石であろう。しかし例外的とはいえ、その文書群に「パイグニア」も含まれているということは、両者に共通の本質が共有されていたからに違いない。例外にこそ、隠された本質が露見していないだろうか。またそもそも「パイグニア」は、本当に「取るに足らない悪戯のトリック」だったのだろうか。確かにそのように思われる文章は多い。しかし鉱物学的、植物学的、動物学的な根拠に基づいた文章も少なく

ないように思われる。「パイグニア」は本来、古代の「化学的知識の言い伝えの残存物」であったのかも知れない。

小稿の目的は、『ギリシア語魔術パピルス』に含まれる二つの「パイグニア」については、それぞれ別稿において史料紹介として詳述するので、ここでは扱わないこととして、その他の様々な文書に散見される主な「パイグニア」を収集・分析することによって、『ギリシア語魔術パピルス』の本質をいわば側面から捉え直そうとする試みである。また、いくつかの事例について、これまでなされなかった化学的解説を加える試みでもある。

２．史料

主な「パイグニア」を以下に収集した。しかし、鉱物、植物、動物などの効用について論じた文章は無数に存在する。それらと「パイグニア」の違いは、後者が基本的に「饗宴」において酔客の前で「上演された」あるいは「語られた」可能性の有無にあるものとする。

（１）『魔術補遺』***Suppl.Mag.***：これは1941年に完成した Preisendanz の *PGM* の補遺として、1941年から1989年までバラバラに出版された魔術文書の集成である。本書に集められた史料は、ラテン語の１点を除いて、全てギリシア語で書かれたもので、神託伺い、ホロスコープ、占星術のテキストなど、いくつかの基準に従って、除外されたものもある[(7)]。その中で「パイグニア」と思われるものは、３文書９点ある[(8)]。

> ***Suppl.Mag.*76**：【１】「下向きになること、そして立たないこと。シビレエイの脳を腰に塗りなさい。」κατακύψαι καὶ μὴ ἀνακύψαι· νάρκης θαλασσίας ἐνκεφάλῳ [χ]ρῖε τὴν ἐσφῦν.（1-2）[(9)]。【２】「浴場で誰かに尋ねること。犬の屍体のダニを腰に押し当てて潰しなさい。」ἐν βαλανείῳ τινὰ ἔρεσθαι· κυνὸς νεκροῦ κροτῶνα θλάσον ἰς τὴν ἐσφῦν.（3-4）[(10)]。【３】「女を弄ぶこと。毒ニンジンの汁を秘所に塗りなさい。」γυναικὶ ἐμπαῖξαι· θαψίας χ[[ει]]υλῶι χρεῖε τὸ αἰδοῖον.（5-6）。【４】「饗宴において喧嘩を起こすこと。犬が噛んだ石を中に投げ入れなさい。」ἐν συ[μ]ποσίῳ μάχην γενέσθαι· κυνόδηκτον λίθον βάλε ἰς τὸ μέσον.（7-8）。【５】「酢を激しく匂わせること。いくつかの石を焼いてその中に入れなさい。」ὄξος δριμὺ ποιῆσαι· ψήφους πυρώσας βάλ᾽ ἐν [αὐ]τῶι.（9-10）[(11)]。【６】「なんども性交するために。セロリとルッコラの種をあらかじめ飲みなさい。」πρὸς πολλὰ βεινῖν· σελείνου καὶ εὐζώμου σπ[έρ]μα πρόπιε.（11-12）。

***Suppl.Mag.*83**：【１】「・・・楽しむこと。・・・ツバメの糞とともにハチミツと混ぜて周りに塗るべし。」. . λ[ ] . ικ . . . ἥδεσθαι· [. . . . .] μετὰ κόπρ[ο]υ χ[ε]-λιδό[ν]ος σὺν μέλειτι π[ερίχ]ρεισαι.（1-4）。【２】「なんども性交すること。ルッコラの種をマツの実とともにワインに入れて擦りつぶし、空腹時に飲みなさい。」πολλὰ συνουσιάζειν· εὐζώμου σπέρμα μετὰ στροβιλίων σὺν οἴνῳ τρείψας νήστης πίε.（5-9）。

***Suppl.Mag.*91**「・・・イアオー・・・アドーナイ・・・宴会において・・・」。]κελαιθ[|　] . . . . . βαλω τα[|　　] Ιαω καὶ ὑφαψα[|　]αω Αδωναιο [|　　vat. |] ἐν συμποσίῳ γυ [|　　]εσσχεθη λέγε ἐπὶ τ[|　]ιε θ[.]ε[c.5] αθ ε[|] . κ[. c.7.] . σιο[| __ __ __（1-8）。

（２）ミカエル・プセロス『異聞』**περὶ παραδόξων ἀκουσμάτων**：著者ミカエル・プセロス（生没年：1018年～1081年より後、洗礼名：コンスタンティン）は、ビザンツ時代のコンスタンティノープルに生まれ、同地で教育を受けた、博学で非常に多作な文人であり、多くの作品が彼に帰されているが、真贋が疑わしいものも多い[12]。彼の『異聞』には、アナクシラオスの『パイグニア』が収録されている[13]。この部分は、ユリウス・アフリカヌス『ケストイ』からの引用と考えられている[14]。ユリウス・アフリカヌスは３世紀のキリスト教徒作家で、医学、農業、博物誌、軍事、ホメロス批評、魔術などを扱った（*GPM*, p.264）[15]。アナクシラオスはラリッサ出身の魔術師で[16]、彼自身「パイグニア」を書いたか収集し、新ピタゴラス主義と医学を結合させた人物で、４世紀のヒエロニムスによれば[17]、前28年にアウグストゥス帝によって「ピュタゴラス派かつ魔術師」Pythagoricus et magus として都市ローマおよびイタリアから追放された[18]。ここには前口上を除いて彼の16点の「パイグニア」が集められている[19]。

Psell.【１】「一方で、不思議なことを行いたいと多くの人は望んでいるでしょう、魔術や禁じられた技でもって。他方であなたは、もしお望みならば（それを自分でやってみて、その結果）、畏敬の念を保つかもしれませんし、それをなして大いに愉快に嘲笑するかもしれません。」παράδοξα δὲ ποιεῖν οἱ μὲν πολλοὶ βούλοιντ᾽ ἂν ἐκ μαγείας καὶ ἀπηγορευμένων τεχνῶν· σὺ δ᾽ ἂν εἰ βούλοιο καὶ τὸ σέβας φυλάττοις καὶ ταῦτ᾽ ἂν ποιοίης καὶ γελῴης ὡς ἥδιστα.（１－２行）。【２】「亜麻の種をとにかくチーズパンといっしょに（して）、海のある部分に撒くと、そこに岸に沿って泳ぐ魚の群れを（あなたは）集めるでしょう。」λινόσπερμα γοῦν μετὰ ἀρτοτύρου ἔν τινι θαλαττίῳ μέρει διασκεδάζων ἐν αὐτῷ τὰ παρανηχόμενα συνάξεις ἰχθύδια.（３－４行）。【３】「またもし（あなたが）闘う雄鶏が勝つこ

とを望むなら、アジアンタムをすりつぶして、いつもの餌に混ぜなさい。」εἰ βούλει δὲ καὶ ἀλέκτορα νικῆσαι μαχόμενον, ἀδίαντον τρίψας τῷ συνήθει βρώματι παραμίγνυε.（５−６行）。【４】「また（あなたは）饗宴において（自分の顔を）エチオピア人のように（黒く）見せるでしょう、もしイカの墨を（ランプの）灯芯に注ぎ込むならば。」αἰθίοπα δὲ ποιήσεις ἐν συμποσίῳ φανῆναι, εἰ σηπίας τὸ μέλαν ἐγχέοις τῷ ἐλλυχνίῳ.（７行）。【５】「そしてホラ貝を手で割りたいならば、密陀僧を細かな粉に挽いて水で（溶いて）塗りなさい。」καὶ στρόβιλον εἰ ἀνοῖξαι βούλοιο χερσί, λιθάργυρον ὕδατι λειώσας κατάχριε.（８行）。【６】「そして徒歩で旅をしても（あなたは）苦労しないでしょう、一茎のヨモギを両手で持っていることによって。」καὶ πεζῇ βαδίζων οὐ πονέσεις ἀρτεμισίαν ταῖς χερσὶ κατέχων μονόκλωνον.（９行）。【７】「そして（あなたは）卵を紫色にするでしょう、もし（卵を）クミンと酢を含んだ熱いオリーブオイルに入れるなら。」καὶ ᾠὸν ἐργάσαιο πορφυροῦν, εἰ ἐμβάλοις ἐν ἐλαίῳ θερμῷ κύμινον καὶ ὄξος ἔχοντι.（10行）。【８】「また鉛と錫を容易に手で柔らかくすることが出来るでしょう、馬の尿にそれらの素材が浸されたままにしておくことで。」μόλιβδον δὲ καὶ κασσίτερον εὐχερῶς μαλάξειας τῇ χειρί, εἰς οὖρα ἵππου ἐάσας βραχῆναι τὰς ὕλας.（11−12行）。【９】「またもし少女が処女であるかどうか（あなたが）知りたいならば、亜炭石を下から燻し、注意深く観察しなさい。そしてもし彼女の口を通して煙が吐き出ないならば、このことが処女であることの確実な検査であると（あなたは）知りなさい。」εἰ δὲ βούλει γνῶναι κόρην εἰ παρθένος ἐστί, γαγάτην λίθον κάτωθεν θυμιῶν περισκέπασον. καὶ εἰ μὴ διὰ τοῦ στόματος αὐτῆς ὁ καπνὸς ἀναπνῇ, παρθενίας τοῦτο δοκιμασίαν ἀκριβῆ γίνωσκε.（13−15行）。【10】「眠ってはいけない時に（あなたは）うとうとしないでしょう、炭酸ナトリウムと硫酸銅の匂いを嗅ぐことによって。」ἀγρυπνῶν τε οὐ νυστάξεις νίτρου καὶ χαλκάνθου ὀσφραινόμενος.（16行）。【11】「また（あなたは）水をワインに変えるでしょう、紫の貝からとった染料を粉末にして、そして水に入れることによって。」ὕδωρ δὲ εἰς οἶνον μεταβαλεῖς κηκῖδας λειώσας καὶ ἐμβαλὼν εἰς αὐτό.（17行）。【12】「また（あなたは）鉄を打ち砕くでしょう、もし（あなたが）鶏冠石と土硫黄を酢に浸して、（それを）鉄に塗るならば。」σίδηρον δὲ ῥήξεις, εἰ σανδαράχην καὶ θεῖον ὄξει καταβρέξας ἐπιχρίσεις αὐτῷ.（18行）。【13】「また鏡に映った妻（の顔）がロバの顔に見えることを、もし（あなたが）望むなら、ロバの涙をその鏡に塗りなさい。」γυναῖκα δὲ ἐνοπτριζομέμην εἰ βούλει δεῖξαι ὀνόρυγχον, ὄνου δάκρυσι χρῖε τὸ ἔσοπτρον.（19-20行）。【14】「また卵を（割らずに）非常な短時間で（あなたは）運ぶでしょう、（卵を入れて運ぶ）網を強烈な匂いのする酢と明礬に丸三日間、浸しておくことによって。」ᾠὸν δὲ διὰ βραχυτάτης διαβιβάσεις τρυμαλιᾶς ὄξει δριμεῖ καὶ στυπτηρίᾳ ἐμβρέχων ἐφ᾽ ὅλαις

ἡμέραις τρισίν.（21–22行）。【15】「また青銅製の金敷は非常に容易に壊されるでしょう、（その金敷に）牡ヤギの血が塗られることによって。」ἄκμων δὲ χαλκέως λυθήσεται ῥᾷστα τραγείῳ χριόμενος αἵματι.（23行）。【16】「そして雄鶏は決してコケコッコーと鳴かないでしょう、鼻の穴にオリーブオイルが塗られることによって。」καὶ ἀλέκτωρ οὐκ ἄν ποτε ἀνακοκκύσειεν ἐλαίῳ τοὺς μυκτῆρας χριόμενος.（24行）。【17】「また文字を水の中に（あなたは）書くでしょう、もし紫の貝からとった染料の薄めたものを水の中にかき混ぜ、鉛白をオリーブオイルといっしょに混ぜ加えるならば。なぜならそれゆえ水の表面は、讃歌ですっかり讃えられると、書き手の記述を受け入れるからです。」γράμματα δὲ εἰς ὕδωρ γράψειας, εἰ κηκῖδα λεπτὴν εἰς τὸ ὕδωρ διασκεδάσειας καὶ ψιμμίθιον ἅμα ἐλαίῳ προσμίξειας· ἐξυμενοῦται γὰρ ἐντεῦθεν ἡ τοῦ ὕδατος ἐπιφάνεια καὶ δέχεται χειρὸς γραφούσης ἐπιβολήν.（25–27行）。

（３）プリニウス『博物誌』***Historiae Naturalis***：著者ガイウス・プリニウス・セクンドゥス（生没年：23/24年～79年）は、北イタリアのコムム出身の富裕な騎士階級の生まれで、若い頃にローマに出て、修辞学、文法、哲学、文学、植物学などを学んだ。47年に騎士士官としてゲルマニアに勤務し、ネロ帝の時代には公職を回避して引退生活を送っていたが、68年に同帝が自殺した後、ウェスパシアヌス帝に重用され、属州ヒスパニア・タラコネンシス、属州シリアなどで皇帝代理を務め、エジプトでも軍務についた。その後ローマに召喚され、皇帝の諮問会議のメンバーとなった。『博物誌』がいちおう完成したのは77年のことであるが、79年のウェスウィウス火山の噴火によって絶命するまで修正された。『博物誌』全37巻は、ティトゥス帝に献呈された一種の百科全書であり、各巻の内容は以下の通り。１巻（献辞、目次、参考文献）、２巻（宇宙、気象、地球）、３～６巻（地理）、７巻（人間）、８～11巻（動物）、12～17巻（植物）、18～19巻（農業）、20～27巻（植物性薬剤）、28～32巻（動物性薬剤）、33～37巻（金属、石、彫刻、絵画など）。プリニウスは自然界に存在するものの完全な目録を作り、それらが人間生活にいかに関わっているかを示そうとした。膨大な知識の集積ではあるが、想像の世界と真実の世界、神話の世界と現実の世界がない混ぜになっており、魔術を非難しながらも、マゴス僧の言葉も伝えている。同書はいわば巨大な知識の貯水池のようなもので、中世において最も権威ある科学書として読まれ、ルネサンスにおいて再発見される必要のなかった数少ない書物の一つである[(20)]。同書にはアナクシラオスの「パイグニア」とされる文書３点が含まれる[(21)]。

Plin. *HN*. 28.181「交尾に由来する雌馬の分泌物は、ランプの灯芯で燃やされると、馬の頭の異常な光景を見せる、ロバからの（分泌物）も同様であると、ア

ナクシラオスは伝えた。」equarum virus a coitu in ellychniis accensum Anaxilaus prodidit equinorum capitum visus repraesentare monstrifice, similiter ex asinis.。

Plin. *HN*. 32.141「イカの墨には大きな力があり、（それを）ランプに加えると、先の灯りは消え失せ、（人々の顔が）エチオピア人のように（黒く）見られるほどであると、アナクシラオスは伝えている。」sepiae atramento tanta vis est, ut in lucernam addito Aethiopas videri ablato priore lumine Anaxilaus tradat.。

Plin. *HN*. 35.175「またアナクシラオスは、それ（硫黄）で（人々を）騙した。饗宴において、ワインの杯に（硫黄を）入れ、火のついた炭火をその下に置いて、（それを）持って（食堂を）巡ると、（硫黄の）燃え上った光の反射によって、（人々の顔が）まるで死人のようなゾッとする蒼白さを発した。」lusit et Anaxilaus eo, addens in calicem vini prunaque subdita circumferens, exardescentis repercussu pallorem dirum velut defunctorum effundente in conviviis.。

（４）『キュラニデス』***Cyranides***：これはさまざまな鉱物、植物、動物がもつ魔術的・医術的な力に関して、ギリシア語で簡潔に記述した小冊子であるが、そのオリジナルは１世紀から２世紀のエジプト語の、おそらくコプト語の書物であったと考えられる[22]。この書物は、ヘルメス・トリスメギストスの名でエジプトに広く流布した異教神学に関する書物と、同神の啓示とされる自然科学・似非医学に関する書物が結び付いたものである。この書物はエジプトで成立し[23]、全オリエント、小アジア、パレスチナ、シリア、そしてエウフラテス河地方にまで流布し、占星術的・魔術的な見方とも融合した。またアラブ時代にも、その連続性の明確な痕跡が見られ、12世紀後半に行われたアラビア語書物のラテン語への翻訳を通じて、ヨーロッパにおける魔術・錬金術の普及に重要な役割を果たした。一方、ビザンツ帝国においても広く普及し、医学書として利用された。またキリスト教の教父たちや他の執筆者たちも参照した。この書物は第一部（第１巻）と第二部（第２～６巻）で構成され、先行する以下の三つの作品から選び出された情報をつなぎ合わせたものである。一つは「キュラノスの書物」、これはペルシア王「キュロス」のコプト語訛り「キュラノス」に由来する。もう一つは「ハルポクラティオンの書物」、ハルポクラティオン（医術と占星術に関する作家[24]）はアレクサンドリア出身らしいが、詳しいことは不明であり、おそらくリバニオスの友人である弁論家のウァレリウス・ハルポクラティオンとは別人で、この書物の著者としてのみ知られる後期帝政期の人物であるようだ。残る一つの「古い書物」とは、おそらく『キュラニデス』の先駆的な書物で、同様に各項目がアルファベット順に並べられていたものであろう[25]。この書物には16点の「パイグニア」が確認される[26]。

***Cyr.*1.1.140–144, p.30**「マカイラよ、神から出自する女主人よ、ブドウを実らせる母よ、全き神のごとく清らかな本質の、樹木たちにおける第一たるものに、エアオーウ・イオエー、過剰のワインによっても宴会が正気（であり続けるよう）見守りください。イウアエーオーエオ、オリュンポス山の女（神）よ。以上のことを酒杯の中に向かって唱えて、（その酒杯を）皆が（ワインを汲んで）飲む壺へ入れなさい。すると（皆は）緊張から解放され、楽しくなって、いかなる口論もしなくなる。」Μάκαιρα ἐκ θεοῦ ἄνασσα βορτυοφόρε μῆτερ, ἁπάσης θείας φύσεως εὐαγοῦς ἐν φυτοῖς τῇ πρώτῃ ἐαωυ ἰοη εὐνοίων φρενῶν τήρησον εὐωχίαν ἰυαηωεο Ὀλύμπου οὖσα. ταῦτα εἰπὼν εἰς ποτήριον, βάλλε εἰς κεράμιον ὅθεν πίνουσιν ἅπαντες καὶ ἀναλύουσιν εὐφρανθέντες μηδενὸς συζητήσαντος.。

***Cyr.*1.1.161–169, p.31**「キュラノスの讃辞に関する碑文は、以下のようなものであった。大いに神のごとき樹木よ、ブドウを実らせるブドウ樹よ、樹木たちの清らかなる母よ、慈悲深い大地の鈴を実らせる者よ、樹木たちにおける第一たるものよ。これらの呪文を酒杯の中に向かって唱えなさい。エウイエー・過剰なワインによって私の正気が狂わされないよう見守りください。エウイエーエ・オリュムポス山に住まう女（神）よ、私の心の正気をともに見守りください。好意に満ちた大いに神のごとき健全なる女（神）よ。エウエイ・エウアエ・アエエーイアエーオ・エアオーエ。以上のことをワインの酒杯の中に向かってさらに唱え、皆が（汲んで）飲むワインの壺に（その酒杯を）入れなさい。すると皆は緊張から解き放たれ、（飲み）仲間たちは楽しくなり、いかなる口論もしなくなる。」Ἡ δὲ τοῦ Κυρανοῦ περὶ εὐφρασίας στήλη εἶχεν οὕτως: θειοτάτη βοτάνη βοτρυοφόρε ἄμπελος λευκὴ ἡ μήτηρ τῶν βοτανῶν εὔδιε κυμβαληφόρε γῆς ἐν φυτοῖς ἡ πρώτη. λέγε εἰς ποτήριον τοὺς λόγους τούτους. εὐιη· εὐοινῶν φρενῶν μου τήρησον ἀβλαβῆ εἶναι. εὐιηε· Ὀλυμπία οὖσα συντήρησόν μου νοὸς φρένας, εὔθυμος οὖσα καὶ θειοτάτη καὶ ὑγιής· ευει ευαε αεηιαηο εαωε. ταῦτα εἰς ποτήριον οἴνου ἐπειπὼν βάλλε εἰς κεράμιον οἴνου ὅθεν πίνουσιν πάντες, καὶ ἀναλύουσιν πάντες εὐφρανθέντες οἱ φίλοι μηδενὸς συζητήσαντος.。

***Cyr.*1.3.23–31, p.36**「さて、鳥のグラウコスと魚のグラウコスの目を、少量の海水ととにもペースト状にして、（それを）ガラスの容器に取っておきなさい。よりよいのは両方の胆汁も拭き取ることです。そして（それを）ガラスの容器に入れて取っておきなさい。さて（あなたが）その（液体のもつ）性質の力を嘆称したい時には、（絵を）描きなさい、上述した液体から（作られた）軟膏で、きれいな未使用のパピルスの上に。すると昼間には見えないのに、そして夜になって暗闇で（その絵を）見た人々は、逃げ出すでしょう、（その絵が）ダイモー

ンか神々であると思い込んで。」Γλαύκου οὖν τοῦ ὀρνέου καὶ γλαύκου τοῦ ἰχθύος τοὺς ὀφθαλμοὺς λειώσας μεθ᾽ ὕδατος ὀλίγου θαλασσίου, ἀπόθου ἐν ὑελίνῳ ἀγγείῳ· κάλλιον δέ ἐστι καὶ τὰς χολὰς ἀμφοτέρων σμῆξαι, καὶ ἐπιτιθέναι ἐν ἀγγείῳ ὑελίνῳ καὶ ἀποθέσθαι. ὅταν οὖν θέλῃς θαυμάσαι τὴν δύναμιν τῆς φύσεως, γράψον ἐκ τοῦ προειρημένου ὑγροῦ κολλυρίου ἐν καθαρῷ ἀγράφῳ χάρτῃ· καὶ ἡμέρας οὐχ ὁραθήσεται, σκοτίας δὲ γενομένης ἀναγνωσθήσεται τὸ γραφέν. εἰ δὲ εἰς τοῖχον θέλῃς, ζωγράφησον ζώδιον οἷον θέλεις, καὶ νυκτὸς γενομέμης οἱ θεωροῦντες ἐν τῇ σκοτίᾳ φεύξονται δοκοῦντες δαίμονας ἢ θεοὺς εἶναι.。

***Cyr.*1.8.13–17, p.58**「さて、この樹木（バッケラ）の１ドラクマとその石（テュルシテース）の１ウンキアを、もし誰かがペースト状にして、ディオニュソスの名を唱え、それを皆が（汲んで）飲むワインの壺に入れ、酒杯を一つだけ（使い回す）ならば、すると（そのワインを）飲む人々は皆、緊張から解放されて、酔っ払って感謝して次のように言う。『（あなたは）我々を上機嫌に（なさいました）、主よ』。」。Τοῦ οὖν φυτοῦ τούτου ἐάν τις λειῶσῃ ὅσον δραγμὴν α΄καὶ τοῦ λίθου οὐγ. α΄καὶ εἴπῃ τὸ διονυσιακὸν ὄνομα, βάλῃ δὲ αὐτὸ εἰς κεράμιον οἴνου ὅθεν πάντες πίνουσιν ἓν ποτήριον μόνον, καὶ πιόντες ἀναλύσουσιν πάντες ὡς μεθύοντες καὶ εὐχαριστοῦντες, λέγοντες ὅτι "ηὔφρανας ἡμᾶς δέσποτα".。

***Cyr.*1.15.28–32, p.78–79**「ウズラのあるいはハタの目をペースト状にして、少量の水とともにガラス容器に７日間漬けなさい。それから少量のオリーブオイルを加え、それ（ガラス容器）から（その液体を）ランプに入れなさい、あるいは灯芯だけに（その液体を）塗りなさい。火を点けてから、ベッドに横臥する人々のところに運びなさい。すると（彼らは）自分たちが燃える目をした鬼のように見えて、全員が立ち上がって逃げ出すでしょう。」Τοῦ δὲ ὄρτυγος ἢ τοῦ ὄρφου τοὺς ὀφθαλμοὺς λειώσας μεθ᾽ ὕδατος ὀλίγου ἐν ὑελίνῳ ἔχε ἀγγείῳ ἐπὶ ἡμέρας ζ΄. εἶτα πρόσβαλε ἔλαιον βραχύ, ἐκ δὲ τούτου εἰς τὸν λύχνον βάλε ἢ τὸ ἐλλύχνιον μόνον ἅλειψον· ἅψας δὲ κόμισον τοῖς ἀνακειμένοις, καὶ ὄψονται ἑαυτοὺς ὡσεὶ δαίμονας πυρωπούς, ὥστε ἀναστάντας πάντας φεύγειν.。

***Cyr.*1.15.33–37, p.79**「オニキスの石にウズラとその足の下にハタの魚を彫りなさい。また（上述の）ランプに入れる混ぜ物から（出きた液体を）、その石の下に（垂らしなさい）。すると誰もあなたが見えないでしょう、またもし（あなたが）そこにいる人たちの何かに触れたとしても、（見え）ないでしょう。あなたの顔にその混ぜ物から（出きた液体を）塗りなさい、そしてその指輪をはめなさい。すると誰であれ誰もあなたが見えないでしょう、（あなたがそこに）

いても、あるいは（あなたが）何かをしても。」Εἰς δὲ τὸν ὀνυχίτην λίθον γλύψον ὄρτυγα καὶ ὑπὸ τοὺς πόδας αὐτοῦ τὸν ὀρφὸν[27] τὸν ἰχθύν, ἐκ δὲ τοῦ συνθέματος τοῦ εἰς τὸν λύχνον ὑπὸ τὸν λίθον βάλε, καὶ οὐδείς σε ὄψεται, οὐδὲ ἐὰν βαστάζῃς τι τῶν ὄντων· τὴν δὲ ὄψιν σου χρῖσον ἐκ τοῦ συνθέματος καὶ τὸν δακτύλιον φόρει, καὶ οὐδείς σε ὄψεται ἤ τις ἂν ᾖς {καὶ} ἤ τι καὶ ἂν ποιῇς.。

***Cyr.*1.24.52–57, p.107**「先に示された石を樹液と鳥の血で磨きなさい、そしてオーミス（魚）の頭一つを少量の水とともにガラスの容器の中に漬けておきなさい。そして（あなたが、その威力を他人に）見せたい時には、左手の指に、あるいは右（手の指に、その液体を）付けて、（あなたの）好きなものに触れなさい、非常に硬い石であれ、木であれ、骨であれ。するとたちまち（それらのものは）砕かれるでしょう。その結果、その場に居合わせた人々は、あなたがマゴス僧であると思うでしょう。」Τὸν δὲ λίθον τὸν προδηλωθέντα λείωσον μετὰ χυλοῦ τῆς βοτάνης καὶ αἵματος τοῦ πτηνοῦ καὶ κεφαλὴν μίαν τῆς ὠμίδος καὶ ὀλίγου ὕδατος καὶ ἔχε ἀποκείμενον ἐν ὑελίνῳ ἀγγείῳ, καὶ ὅταν θέλῃς ἐπίδειξιν ποιῆσαι, μόλυνον τοῦς δακτύλους τῆς εὐωνύμου χειρὸς ἢ τῆς δεξιᾶς καὶ ἅψε οἵου θέλεις ἰσχυροτάτου λίθου ἢ ξύλου ἢ ὀστέου καὶ θραυσθήσετα παραυτίκα ὥστε δοκεῖν τοὺς παρατυχόντας μάγον σε εἶναι.。

***Cyr.*2.31.20–21, p.164**「もしある人がロバの皮の上で眠るなら、ありとあらゆるダイモーンを恐れないでしょう、またゲローも悪夢も。」Ἐὰν δέ τις καθεύδῃ ἐπὶ δορᾶς ὄνου, παντοίους δαίμονας οὐ φοβεῖται, οὐδὲ τὴν Γελλὼ καὶ νυκτερινὰ συναντήματα.[28]。

***Cyr.*2.31.21–23, p.164**「またロバの涙をオリーブオイルと（混ぜて、それで）ランプを拭ってきれいにして火を点けると、饗宴にいる全ての人々がロバの頭をしているように見えるでしょう、自分たち自身も互いにも。」δάκρυα δὲ ὄνου σὺν ἐλαίῳ σμήξας καὶ πλύνας λύχνον καὶ ἅψας, ὄψει πάντας τοὺς ἐν συμποσίῳ ὀνοκεφάλους καὶ αὐτοὶ τοὺς ἀλλήλους.。

***Cyr.*2.31.24–26, p.164**「雄ロバの尻の毛を、もし取って燃やし、そして柔らかくして妻の飲み物の中に入れるなら、（彼女は）放屁が止まらなくなるでしょう。彼女の救い。雌ロバの毛を燃やして、同様に飲むために与えなさい。」Τρίχας δὲ ἐκ τῆς πυγῆς τοῦ ὄνου ἐὰν λαβὼν καύσῃς καὶ λειώσας δώσῃς ἐν ποτῷ γυναικί, οὐ παύσεται πέρδεσθαι. λύσις δὲ αὐτῆς· ὄνου θηλείας τρίχας καύσας δίδου πιεῖν ὁμοίως.。

***Cyr.*2.40.6–18, p.176**「混ぜ物は以下の通り。グラウコス魚の目とハイエナの胆汁、全液体。全部いっしょにペースト状にしなさい、そしてガラスの容器に取っておきなさい、よく十分に気をつけて。さて（あなたが、その液体の）偉大な（力を他人に）見せたい時には、次のようにしなさい。ランプが置かれた時、もし（あなたが）望む（動物の）脂肪を、這う動物のであれ、四つ足の動物のであれ、少量のあの液体と混ぜて、パピルスにあるいはガチョウ（の羽？）に塗り、そして（そこに）いる人々に示すならば、夕方にランプが置かれた時に、（すると）彼らはその脂肪の動物が（そこに）いるように思い込むでしょう、ライオンのであれ、牡牛のであれ、蛇のであれ、何か他の（動物）のであれ。さてもし（あなたが、その液体の威力を他人に）見せたい時には、（あなたが）望む（動物の）脂肪を、少量のあの液体と（混ぜて）、家の真ん中の炭の上に置きなさい、すると（あなたが）さらに混ぜた脂肪の動物が現れるでしょう。同じ効果があります、鳥についても。」τὸ δὲ σύνθεμά ἐστι τοιοῦτον: γλαύκου ἰχθύος ὀφθαλμοὶ καὶ χολὴ ὑαίνης, ὅλον τὸ ὑγρόν. λείου ὁμοῦ πάντα καὶ ἀπόθου ἐν ὑελίνῳ ἀγγείῳ καλῶς περισκεπάσας. ὅταν οὖν βούλῃ ἔνδειξιν μεγίστην ποιῆσαι, ποίησον οὕτως: λύχνου τεθέντος, ἐὰν στέαρ οἴου βούλει ἑρπετοῦ ἢ τετραπόδου μίξῃς μετὰ βραχέως τοῦ συνθέματος καὶ χρίσῃς βυβλάριον ἢ χηνάριον, καὶ δείξῃς τοῖς παροῦσιν ὀψίας λύχνου τεθέντος, δόξουσιν ἐκεῖνοι εἶναι τὸ θηρίον οὗ ἐστιν τὸ στέαρ, εἴτε λέοντος εἴτε ταύρου ἢ ὄφεως ἢ ἑτέρου τινός. ἐὰν οὖν θέλῃς ἐνδείξασθαι στέαρ οἴου θέλεις θηρίου μετὰ ὀλίγου τοῦ συνθέματος, ἐπίθες ἐπ᾽ ἀνθράκων ἐν μέσῳ τοῦ οἴκου, καὶ φανήσεται τὸ ζῷον οὗ τὸ στέαρ προσέμιξας. τὸ αὐτὸ δὲ ποίει καὶ ἐπὶ πετεινῶν.。

***Cyr.*2.40.19–21, p.176**「またもし（あなたが）海の波から（取った）少量の水を、その混ぜ物と混ぜて、饗宴において撒き散らすならば、皆は逃げ出すでしょう、自分たちの真ん中に海があると思って。」Ἐὰν δὲ ἀπὸ κύματος θαλάσσης ὕδωρ βραχὺ μίξῃς τῷ συνθέματι καὶ ῥάνῃς ἐν συμποσίῳ πάντες φεύξονται νομίζοντες θάλασσαν ἐν μέσῳ αὐτῶν εἶναι.。

***Cyr.*3.13.5–9, p.204**「その（アオサギの）嘴をカニの胆汁とともにラバの皮に（入れて）、もし（あなたが）身につけるならば、不眠症の人々には眠けを作り出すでしょう。またもし誰かが饗宴において、中にその嘴が入っている布切れをワインに入れるならば、（そのワインを）飲んだ人たちは、まるで何日間も眠っていないかのように、（饗宴の場を）出て行って眠るでしょう、気づくこともなく。」Τούτου τὸ ῥάμφος μετὰ καρκίνου χολῆς ἐν δέρματι ὀνείῳ εἰ περιάψῃς, τοῖς ἀγρυπνοῦσιν ὑπνῶσαι ποιήσεις. εἰ δέ τις ἐν συμποσίῳ θείη τὸ ῥάκος ἐν ᾧ ἐστι τὸ ῥάμφος εἰς τὸν οἶνον, οἱ πιόντες ἀποκοιμηθήσονται ὡς πολλῶν ἡμερῶν ἄγρυπνοι

ὑπάρχοντες καὶ μὴ αἰσθανόμενοι.

***Cyr.*4.9.7–10, p.249**「その（グラウコス魚の）両目、また同様にハタの、そしてマグロの、そしてヒトデの（両目）、そしてハイエナの胆汁がいっしょにペースト状にされて、もし（あなたが）望みの動物の脂肪と混ぜて、そして（それを）火が灯されたランプで燻すならば、見物人たちは、混ぜられた脂肪の動物がそこにいると信じ込むでしょう。」Οἱ δὲ ὀφθαλμοὶ αὐτοῦ ἀμφότεροι καὶ ὄρφου ὁμοίως καὶ θύννου καὶ ἀστέρος θαλασσίου καὶ χολῆς ὑαίνης συλλειούμενα, ἐὰν μίξῃς οἴου βούλει θηρίου στέαρ καὶ λύχνου καιομένου θυμιάσῃς, οἱ ὁρῶντες νομίσουσιν τὸ θηρίον ἐκεῖνο εἶναι, οὗ τὸ στέαρ ἔμιξας.

***Cyr.*4.9.10–12, p.249**「同様にまた、海の水を混ぜると、（彼らは）海を見ていると思います。もし川の水なら川を、雨の水なら雨を（見ていると思います）。」ὁμοίως δὲ καὶ ὕδωρ θαλάσσιον μίξας δόξουσιν θάλασσαν ὁρᾶν. εἰ δὲ ἀπὸ ποταμοῦ, ποταμόν, εἰ δὲ ἀπὸ βροχῆς, βροχήν.。

***Cyr.*4.23.2–8, p.261**「マグロは海の魚である。その胆汁は、常緑樹の樹液といっしょに注ぎ込まれ、白目の部分を取り除きます。マグロの目を、もし（あなたが）、クラゲといっしょにペースト状にして、（それを）家の天井に振りかけて、やっと暗くなった時、その家にいる人たちは星を見ていると思うでしょう。またもし（それを、あなたが）杖に塗るならば、遅い時間に、月のない夜に、旅をする時に、（すると）光がその杖から放たれているのを（あなたは）見るでしょう。（それで）またもし（あなたが）壁あるいはパピルスに、あなたが望む生き物や動物を描くならば、書かれた（絵は）、昼間は見えないが、夜が捕らえた時には見られるでしょう。」Θύννα ἰχθύς ἐστι θαλάσσιος. ταύτης ἡ χολὴ σὺν ὀπῷ ἀειθαλοῦς βοτάνης ἐγχεομένη λευκώματα ὀφθαλμῶν αἴρει. ὀφθαλμοὺς δὲ θύννης ἐὰν λειῶσας μετὰ πνεύμονος θαλασσίου ῥάνῃς τὴν στέγην τοῦ οἴκου ὀψὲ σκοτείας οὔσης, δόξουσιν οἱ ἐν τῷ οἴκῳ ἀστέρας βλέπειν. ἐὰν δὲ ῥάβδον χρίσῃς ὁδεύων ὀψέ, ἀσελήνου νυκτός, δόξεις φῶς ἐκ τῆς ῥάβδου ἀποπέμπεσθαι. ἐὰν δὲ ἐν τοίχῳ ἢ ἐν χάρτῃ γράψῃς οἷον θέλεις ζῷον ἢ θηρίον, ἡμέρας μὲν οὔσης οὐχ ὁρῶνται, νυκτὸς δὲ καταλαβούσης ὀφθήσονται τὰ γραφόμενα.[29]。

（5）アイリアノス『動物奇譚集』***Περὶ Ζῴων Ἰδιότητος***：著者クラウディウス・アエリアヌス（生没年：170年頃～235年頃）は、ローマ近郊の避暑地プラエネステで生まれた解放自由人身分のローマ人であった。しかし彼が著した作品が全てギリシア語だったので、ギリシア人風にクラウディオス・アイリアノスと呼び習わされた。

彼はローマでソフィストとして活躍したが、フィールドワークはせず、さまざまな書物から知識を得た。典拠は104名以上にのぼる。本書17巻の原題の直訳は「動物の特性について」*De Natura Animalium* となり、獣、魚、鳥、這うもの、虫、架空の生き物が扱われている。本書は、動物と人間を一続きのものとして捉え、両者には共通する様々な徳が備わっていると考えて、動物のそのような徳にまつわる奇譚を収集したものであり、近代の動物分類学・博物学の祖とみなされる[30]。この書物の一部は、「偽デモクリトス」ボロスの書物に由来している[31]。「パイグニア」は１点のみ確認される[32]。

Ail.*NA*.1.38「またもしある人が口論と争いを宴会において起こしたいなら、犬によって噛まれた石をワインに入れると、宴会客たちを苦しめる、気が狂ったようにさせて。」ἔριν δὲ εἴ τις καὶ στάσιν ἐθέλοι ἐν τῷ συνδείπνῷ ἐργάσασθαι, δηχθέντα ὑπὸ κυνὸς λίθον ἐμβαλὼν τῷ οἴνῳ λυπεῖ τοὺς συμπότας ἐκμαίνων.。

（６）アテナイオス『食卓の賢人たち』***Δειπνοσοφισταί***：著者アテナイオス（生没年：２世紀後半～３世紀）は「第二ソフィスト時代」の人であるが、彼自身についてほとんど知られておらず、ナイル河口のナウクラティス出身であること、コンモドゥス帝（治世：180年～192年）の頃に活躍したこと、他に『シリアの王たち』という著書があることくらいである。奇書とも呼ばれるこの書物は、ローマの騎士階級に属するラレンシオス（ラテン名：ラレンシス）という人物が主催した４日間にわたる饗宴において語られた、酒、魚、野菜、果物、肉、魚、料理、食べ方、食器、酒杯、香油、余興など、饗宴に関わることをはじめ、あらゆることについての博覧強記な議論の一部始終を、著者が友人に伝えるという設定で書かれたもので、いわゆる「饗宴文学」の一つである。この書物の価値は、今では失われてしまった書物からの膨大な量の引用、特にギリシアの中・新喜劇からの引用が極めて多くあることで、ギリシアの中・新喜劇はローマ喜劇に影響を与え、ローマ喜劇はシェイクスピアやモリエールに影響を与えたので、『食卓の賢人たち』は近代ヨーロッパ喜劇の源といえる[33]。本書には７文章に「パイグニア」８点と『パイグニア』と題する３冊の本に言及がある[34]。

Athen.1.18d-e【１】「そしてまた菓子の製造や性交に関する過度な努力があまりにも盛んになり、結果としてスポンジを下に置くことが考案され、実際にそのようなことはセックスの回数を増やすのに貢献した。」ἀνθοῦσι δὲ καὶ αἱ τῶν περὶ τὰ πέμματα δημιουργίαι καὶ αἱ περὶ τὰς συνουσίας περιεργίαι, ὥστ᾽ ἐπιτεχνᾶσθαι σπόγγους ὑποτίθεσθαι· ἐπακτικὸν γὰρ εἶναι τὸ τοιοῦτον πρὸς ἀφροδισίων πλῆθος.（18d）。【２】「またテオフラストスは以下のように言って

いる（『植物誌』9.18.9）[35]。ある催淫剤は70回も性交を遂げさせるが、しまいには彼らに出血の報いがある。」Θεόφραστος δ’ οὕτω φησί τινας ὀχευτικὰς δυνάμεις εἶναι ὡς καὶ μέχρι ἑβδομήκοντα συνουσιῶν ἐπιτελεῖν καὶ τὸ τελευταῖον αὐτοῖς αἷμα ἀποκρίνεσθαι.（18d）。【３】「またフュラルコスは言っている。インド人たちの王サンドロコットスは、セレウコスに送った贈り物とともにある催淫剤を送り、それらは性交する者たちの足の下に置かれると、ある人たちには鳥のような衝動を生じさせるが、ある人たちにはやる気を失せさせる。」Φύλαρχος δὲ Σανδρόκοττόν φησι τὸν Ἰνδῶν βασιλέα Σελεύκῳ μεθ’ ὧν ἔπεμψε δώρων ἀποστεῖλαί τινας δυνάμεις στυτικὰς τοιαύτας ὡς ὑπὸ τοὺς πόδας τιθεμένας τῶν συνουσιαζόντων οἷς μὲν ὁρμὰς ἐμποιεῖν ὀρνίθων δίκην, οὓς δὲ καταπαύειν.（18e）。

Athen.2.52d-e：「カイロネイア人のプルタルコスが言っている（『食卓歓談集（モラリア）』624c-d）[36]。ティベリウス帝の息子ドルソスのところに、ある医者が（いて、彼は酒を）飲むことにおいてあらゆる人を凌駕したが、酒宴の前に苦アーモンドを５粒か６粒あらかじめ食べているところを見られた。（彼は）まさにそれらを適用することを禁じられると、全く少ない量の飲酒にも耐えられなかった。さてその原因は苦味の力にあった。（苦味に）水分を乾かし消費する（効力が）あった（からである）。」Πλούταρχος δὲ ὁ Χαιρωνεύς φησι παρὰ Δρούσῳ τῷ Τιβερίου Καίσαρος υἱῷ ἰατρόν τινα ὑπερβάντα πάντας ἐν τῷ πίνειν φωραθῆναι πρὸ τοῦ πότου προεσθίοντα πικρὰς ἀμυγδάλας πέντε ἢ ἕξ· ἅσπερ κωλυθεὶς προσενέγκασθαι οὐδὲ πρὸς τὸ μικρότατον ἀντέσχε τοῦ πότου. αἴτιος οὖν ἦν ἡ τῆς πικρότητος δύναμις, ξηραντικὴ καὶ δάπανος ὑγρῶν οὖσα.。

Athen.2.57c：「シフノス人のディフィロスは（次のように）言っている。「マツの身は栄養豊富であり、気管を滑らかにし、また胸を浄化する、樹脂を中に含み持っていることによって」。」Δίφιλος δ’ ὁ Σίφνιός φησιν· "οἱ στρόβιλοι πολύτροφοι μέν εἰσι, λεαντικοὶ δὲ ἀρτηρίας καὶ θώρακος καθαρτικοὶ διὰ τὸ ἔχειν παρεμπεπλεγμένον τὸ ὀητινῶδες.[37]"。

Athen.2.58f：「カリマコスの弟子のヘルミッポスも、「空腹を癒す」に加えて「喉の渇きを癒す」と呼ばれる（療法）のために、ゼニアオイを入れることは、非常に有用である、と言っている。」Ἕρμιππος δ’ ὁ Καλλιμάχειος καὶ εἰς τὴν καλουμένην φησὶν ἅλιμον προσέτι τε ἄδιψον ἐμβάλλεσθαι τὴν μαλάχην οὖσαν χρησιμωτάτην.[38]。

Athen.2.69e-f：「ディフィロスは言っている。レタスの茎は・・・セックスに対する衝動を抑制すると。」Δίφιλος δέ φησιν ὡς ὁ τῆς θρίδακος καυλὸς . . . ἐφεκτιτὴ τῆς πρὸς ἀφροδίσια ὁρμῆς.。

Athen.2.69f:「レタスの茎は、喉の渇きを消す（性質があると）見なされている。」ὁ δὲ καυλὸς τῆς θρίδακος ἄδιψος εἶναι δοκεῖ.。

Athen.321f-322a：「この魚（サルペ）は多彩である。そこからまたロクリス人かコロフォン人のムナセアスが書いた『パイグニア』と題する（書物を）、その集成（された話題）の多彩なことによってサルペと、（彼と）親交のある人々は呼んだ。またシュラクサ人のニュムフォドロスは彼の『アジア周航記』の中で、『パイグニア』を集成したサルペはレスボス人女性であると言っている。またアルキモスは彼の『シケリア史』の中で、サルペの（名で）呼ばれているものに非常に近い『パイグニア』の考案者は、ボトリュス島の向かいのメッセニア出身であると言っている。」ἐστὶ δὲ ποικίλος ὁ ἰχθύς. ὅθεν καὶ τὸν Λοκρὸν ἢ Κολοφώνιον Μνασέαν συνταξάμενον τὰ ἐπιγραφόμενα Παίγνια διὰ τὸ ποικίλον τῆς συναγωγῆς Σάλπην οἱ συνήθεις προσηγόρευον. Νυμφόδωρος δὲ ὁ Συρακόσιος ἐν τῷ τῆς Ἀσίας Περίπλῳ Λεσβίαν φησὶ γενέσθαι Σάλπην τὴν τὰ παίγνια συνθεῖσαν. Ἄλκιμος δ᾽ ἐν τοῖς Σικελικοῖς ἐν Μεσσήνῃ φησὶ τῇ κατὰ τὴν νῆσον Βότρυν γενέσθαι εὑρετὴν τῶν παραπλησίων παιγνίων τοῖς προσαγορευομένοις Σάλπης.[39]。

３． 分類と解説

さて、以上の史料は三つのグループに分類されるように思われる。１）饗宴で上演された見世物に関するもの、２）饗宴で語られた話題に関するもの、３）饗宴のマナーに関するものである。以下では、それぞれのグループごとに、可能な限り化学的な解説を試みる。

１）饗宴で上演された見世物に関するもの

A. 本当に子供の悪戯のようなもの。**Psell.**【７】〈卵を紫色に染める〉。卵を染める手品は今でも手軽にできるもので、その方法も紹介されているし[40]、必要な材料はスーパーで手に入るので実験した。「クミン」は学名 Cuminum cyminum で、セリ科の一年草である。高さ30cm ほどで、花は白色あるいは紅色で、果実は長さ６mm ほどの長楕円形で両端が尖り、果皮に毛がある。これが「クミン」と呼ばれ、薬や香辛料として利用される。カレー粉の主な香辛料の一つであり[41]、挽いた粉は黄土色である。やり方が悪かったのか、結果は期待外れとなった。これを試みた

古代の人たちも、熱せられた酢の匂いにむせたに違いない。従って***Suppl.Mag.*76**【５】〈酢を熱して激しく匂わせる〉は、成功したに違いない。

B. もう少し手品らしいもの。**Psell.**【11】〈水をワインに変える〉。似たようなことを子供の頃にやった人もいるのではないだろうか。「紫の貝からとった染料」はκηκίς の訳であるが、この語の古川訳は「紫貝からとった染料」となっている[42]。しかし「ムラサキガイ」を百科事典で調べると、学名 Hiatula diphos で、海底の泥土に深い穴を掘って住む〈楕円形の〉二枚貝を指し、染料の原料になるとは書かれていない[43]。つまり「ムラサキガイ」は紫の染料を採る貝ではない。紫の染料を採る貝は何種類かあり[44]、主なものは「アクキガイ（πορφύρα／purpura／murex）」[45]と「ホラガイ（κῆρυξ／bucina）」[46]で、いずれも巻貝である。おそらく染料の粉末を手に隠し持っていて、見ている人々の前でこっそりと水に入れて、透明な水を紫色に変えたのだろう。**Psell.**【17】〈水の中に文字を書く〉。「鉛白（エンパク）」はψιμμίθιον の訳である[47]。鉛白は「炭酸水酸化鉛 $Pb_3Co_3(OH)_2$の慣用名」であり、「もっとも古い白色顔料」で、「隠蔽力の大きい顔料として用いられてきたが、有毒」である[48]。「鉛白」は油絵具にも使われるので、「オリーブオイル」にも溶けただろう。そして油は水に溶けないので、「鉛白」は紫色の水の中で複数の白い糸となり、何やら文字らしきものに見えたのではないだろうか。**Psell.**【14】〈卵を割らずに短時間で運ぶ〉。「網」はτρυμαλιᾶς の訳である。この語は、古川によるとτρύμη と同じで、τρύμη は「孔；（比喩的に）ずるい奴、古狸」とあり[49]、意味が通じない。Liddell & Scott[9]によると、hole「穴」、the eye of the needle「糸を通す針の穴」、mesh「網目」とあり、最後の訳については、Aesop.26を参照とあるので、その箇所を見ると、「猟師と小梭魚（しょうかます）」の話の中に、猟師の魚を獲る「網」としてこの語が使われている[50]。「明礬（ミョウバン）」はστυπτηρία の訳である[51]。「明礬」は「複塩の総称」であり、「（カリウムアルミニウムミョウバン）が、もっとも古くから知られており」、「紀元前のギリシアで既にその存在が記録されている」、「染料、顔料（レーキ）、皮なめし」などに用いられたとある[52]。「卵」を入れて運ぶ「網」の素材は不明であるが、皮製だったのではないだろうか。そのために「網」が柔らかくなり、「卵」が割れにくくなったと考えられる[53]。

C. 動物の習性を利用したもの。**Psell.**【16】〈雄鶏を鳴さない〉。これは動物行動学でいうところの「擬死」ないしは「催眠」の利用であろう。「擬死」は鳥類のみならず、霊長類、両生類、爬虫類などでも見られる防御行動の一つで、死んだように動かなくなる行動である。これは人が動物を手で押さえつけることによっても生じる。この行動の目的は、捕食者は死んでしまった被食者を襲わないし、また殺した直後に食べるとも限らないので、隙を見て逃げる最後のチャンスを作るためである[54]。一方、動物の「催眠」（あるいは「緊張性静止」）がよく知られるようになったのは17世紀のある修道士による報告からで、それによると、彼が鶏を地面に押さ

えつけ、鶏の目の前の地面に棒で直線を引き、それを凝視させると、鶏が動かなくなるというものであった。この動物行動を利用して、昔から奇術師はこれを見世物で行っていた。実は、目の前に引かれた直線に意味はなく、重要なのは人が鶏を地面に押さえつけるという行為であることが分かっている。ダーウィン以来、「催眠」は「擬死」の一形態であると考えられており、鶏は人によって地面に押さえつけられたとき、捕食者に捕らえられたと感じ、最後の防御行動を取るのである。この行動は30分ほど続くが、３時間以上続くこともある。また「緊張性静止」は、条件付けをすれば、罰として利用することが出来るという[55]。そうすると、当該文書の場合、不適当な時に鶏が鳴いたとき、鶏の鼻の穴にオリーブオイルを塗るために人が鶏を地面に押さえつけたとすると、その鶏は「緊張性静止」を起こし、鳴きやんだに違いない。またこの行為が繰り返されることによって、オリーブオイルを塗られることが押さえつけの条件付けとなり、オリーブオイルを塗るだけで静止の効果が得られたと考えられる。**Psell.*LM.***【２】〈魚の群れを集める〉。「亜麻の種」は λινόσπερμα（linseed）の訳である[56]。アマはアラビア原産の一年草で、種子は長さ５mm ほどの黄褐色の扁平な長楕円形をしており、種子からとれるアマニ油は乾燥しやすい良質な油で、しぼった油カスは家畜の飼料になる[57]。一方、「チーズパン」は ἀρτότυρος（bread and cheese）の訳で、この語は *PGM* V. 172-212「泥棒を見つけ出す魔術」にも見られ[58]、そこでは浄めの供物として作られる（*GMP*, p.104）。しかし、「亜麻の種」と「チーズパン」を一緒に練って海に撒いたものは、魔術的な供物というより、どう見ても撒き餌であろう。それに魚が群がるのは、なんの不思議もない。**Psell.**【３】〈鶏闘に勝たせる餌〉。「アジアンタム」は ἀδίαντος の訳である。この語を古川は「ホウライシダ」と訳し[59]、Liddell & Scott[9]は maidenhair および Adiantum Capillus-Veneris と訳している[60]。maidenhair は日本語で「ウラボシ科クジャクシダ属（Adiantum）の植物の総称」を指し、「ホウライシダ」や「クジャクシダ」などを含む[61]。Adiantum Capillus-Veneris は、「ホウライシダ〔イノモトソウ科〕」である[62]。一方「クジャクシダ」の学名は Adiantum pedatum である[63]。「アジアンタム」は、イノモトソウ科のクジャクシダ属の総称で、約200種類が分布する[64]。要するに ἀδίαντος は、読んで字の如く、総称としての「アジアンタム」である。その下部分類である「ホウライシダ」の一枚の葉はイチョウの葉に似ており、「クジャクシダ」の葉の集合は孔雀が尾羽を広げたように見え[65]、両者の見た目は全く異なる。結局、種類を特定できないし、雄鶏を闘争的にするような効能についても植物辞典に記述がなかったので、闘う雄鶏の餌に混ぜて食べさせよという指示は、「クジャクシダ」の葉の形と尾羽を広げて闘う雄鶏の姿の、あるいは興奮した雄鶏のシダの葉のように広がった首の羽毛の類感に由来するのかもしれない。

D. 金属など硬いものを打ち砕いたり柔らかくする手品。**Psell.**【８】〈鉛と錫を手でこねる〉。「鉛」μόλιβδος（=μόλυβδος）と「錫」κασσίτερος（=καττίτερος）の合

金は「はんだ」である[66]。ご存知のように、ホームセンターで売られている「はんだ」は、柔らかい針金のようなものである。「それらの素材」と訳した τὰς ὕλας は ὕλη の複数対格で、この語には forest「森」、forest-trees「樹」、wood cut down「木材」、firewood「薪」、material, (perh. so of wood)「（多分、木の）素材」、rarely of other material, as metal「（稀に他の素材、金属のような）素材」を意味するので[67]、「鉛」と「錫」を指すと考えた。もしこれら二つの金属に「カドミウム」と「ビヒマス」を加えると「ウッド合金」が得られる。「ウッド合金」は常温では銀白色の硬い金属であるが、60～90℃のお湯に入れると融解して液体になる「底融点合金」の一種である。また混ぜる素材の割合によって溶ける温度が下がるという[68]。だとすれば、「馬の尿」が40℃くらいとすれば、それにこれらの素材を浸すことによって、融解はしないものの、手で捏ねれるくらいに柔らかくなる可能性はあるだろう。**Psell.**【5】〈ホラ貝を手で割る〉。「ホラ貝」は στρόβιλος の訳である。この語は、古川には「独楽、旋風、くるくる回る踊りの一種、どんぐり」とあり[69]、「ホラ貝」はない。一方 Liddell & Scott[9]には[70]、「どんぐり」はなく、似たものとして pine-cone「松ぼっくり」があるが、これでは意味が通らない。また the ball of an egg-shell, i.e. a round egg-shell「卵の殻のボール、つまり丸い卵の殻)」があるが、「卵の殻」なら簡単に手で割れるのでこれもおかしい。しかし κοχλίας ἢ θαλάττιος κῆρυξ「巻貝あるいは海のホラ貝」がある。κοχλίας は「〈動〉カタツムリ（蝸牛）；蝸牛状のもの（階段など)」の意味で[71]、その類語 κόχλος は「〈動〉巻貝（特に、アクキガイ、ホラガイ、等)、蝸牛」とある[72]。一方 κῆρυξ には「〈動〉ホラガイ」の意味がある[73]。「アクキガイ」や「ホラガイ」は貝紫の染料が採れる貝であり（Plin. *HN*. 9.130)、大きなものは身を穿り出すが、小さなものは面倒なので殻ごと叩き割るのが普通であった（Aristot. *HA*. 5.15.547a. 21-23；Plin. *HN*. 9.126)。「アクキガイ」は多くの突起があるが、「ホラガイ」は丸っこい。したがって στρόβιλος は「ホラ貝」を指し、ハンマーなどを使わずに「手で割りたいならば」と訳した。さて「密陀僧」は λιθάργυρος（litharge, lead monixide）の訳である[74]。litharge は「酸化鉛」[75]、lead monixide は「一酸化鉛」を指す[76]。「一酸化鉛」（別名「酸化鉛（II)」、組成式 PbO）は、「鉛と酸素の化合物」であり、「黄色、斜方晶系の高温安定型」と「橙赤色、正方晶系の低温安定型」の二種類あり、「空気中で加熱して得られる黄色の粉末は「金密陀（きんみつだ）／ massicot」と呼ばれ」、これを「融解させて冷却すると、橙赤色の「密陀僧（みつだそう）／ litharge」が得られ、「鉛丹の製造に用いられる」[77]。「鉛丹」は「赤橙色顔料」のことである[78]。貝殻の主成分は90％以上が炭酸カルシウムであり[79]、炭酸カルシウムは酸で溶ける[80]。当該の文章には λειώσας「細かな粉に挽いて」とあるので、おそらく天然の鉱物に含まれた「密陀僧」を指すと思われ、その酸が貝殻を柔らかくしたのだろう。**Psell.**【12】〈鉄を手で打ち砕く〉。「鶏冠石（ケイカンセキ)」は σανδαράχη の訳である[81]。「鶏冠石」はヒ素の硫化物であり、色

を除いて構造は硫黄と同じで、「ルビーサルファー」とも呼ばれ、火山地帯で産する。絵具や染料として用いられた。「土硫黄（ドイオウ）」は θεῖον の訳である[82]。「土硫黄」は硫黄の中で「火山地方に遊離の状態で産出するもの」を指し、「常温で黄色の非金属性個体」で、「硫酸原料として使用されるものがもっとも多い」[83]。「鶏冠石」も「土硫黄」も似たものであり、「硫酸」の原料となるなら、「鉄」を溶かしただろう。**Psell.**【15】〈青銅製の金敷を破る〉。これは現実的ではない。金網を破るほど強い牡ヤギの類感によるのかも知れない。***Cyr*.1.24.52–57, p.107**〈石・木・骨を手で砕く〉。このレシピに化学的な根拠はなさそうであるが、それによって「（人々は）あなたがマゴス僧であると思うでしょう」の一文は興味深い。

E. ランプを使った手品。***Cyr*.4.9.7–10, p.249**と ***Cyr*.2.40.6–18, p.176**はそっくりで、どちらにも〈動物の脂を燃やすと人々はその動物がそこにいると思う〉というもので、似たものとして **Plin.*HN*.28.181**〈雌馬の分泌物を燃やすと馬が見える〉と ***Cyr*.2.31.21–23, p.164**〈ロバの涙を混ぜて火を点けると人々の顔がロバに見える〉があるが、これらはありそうにない話である。**Plin.*HN*.32.141**と **Psell**【４】もそっくりで、〈イカの墨を入れると人々の顔がエチオピア人のように見える〉というもので、「エチオピア人」という語には「黒人」という意味もあるので[84]、イカ墨の黒と黒人の黒との類感であろうか。それに似たものとして **Plin.*HN*.35.175**〈硫黄を炭火で燃やすと人々の顔が死人のよう蒼白に見える〉がある。これらは、もしかしたら明暗の急激な転換に目がついていけないことによって起こりうる現象かも知れない。また同様のものとして ***Cyr*.1.15.28–32, p.78–79**〈特殊な溶液をランプで燃やすと人々の顔が燃える目の鬼に見える〉がある。***Cyr*.1.15.33–37, p.79**〈透明人間になる〉はありそうにない。ランプは使わないが、明暗を利用したものとして ***Cyr*.4.23.2–8, p.261**と ***Cyr*.1.3.23–31, p.36**は〈昼は見えないが夜になると見える絵〉がある。

さて、ランプおよび光の明暗を利用した「パイグニア」について、Mastrocinque が興味深い解釈をしている。つまりそれは本来、ミトラ教の会堂（ミトラエウム）での饗宴の際に信徒に見せられた神秘的なトリックであったというものである。そもそもペルシア王家との血縁を誇るアナトリア地方の王たちの饗宴にはマゴス僧がおり、彼らは薬草や毒草の知識を持っていた。そして先に見たように、ローマ市民の饗宴にも「（人々が）マゴス僧であると思う」者がいた（*Cyr*.1.24.57, p.107）。マゴス僧と思われる者と本物のマゴス僧を区別することは難しいが、ミトラエウムは個人の邸宅の食堂であり、その所有者はミトラ教徒の共同体の指導者であり、古代ペルシアのマゴス僧の後継者になりきっていた。各地に現存するミトラエウムは洞窟のように暗い部屋であり、そこからは、光のイリュージョンを引き起こす仕掛けや遺物が多数発見されている[85]。確かに、この指摘は興味深い。ただこの種の「パイグニア」がミトラエウムのみで行われたとは考えにくい。実際には、ミトラエウムで行われたトリックのパロディーがローマ市民の饗宴においても行われたと考え

るのが自然ではないだろうか。この場合、「パイグニア」の上演者がマゴス僧になりきっていたことになる。

ところで、上で見た ***Cyr.*1.15.28–32, p.78–79**は「全員が立ち上がって逃げ出すでしょう」、***Cyr.*1.3.23–31, p.36**は「（人々は）逃げ出すでしょう」という表現で終わり、ただならぬ気配があり、皆がパニックに陥っているように感じる。全く証拠はないが、ひょっとすると、ランプの油に何らかの薬物を混ぜて炙り、酔客たちに嗅がせて幻覚作用を起こしたのではないだろうかと勘ぐりたくなる。また ***Cyr.*4.9.10–12, p.249**と ***Cyr.*2.40.19–21, p.176**は、溶液を水に混ぜて人々の前に撒くと、〈人々は目の前に海があると思う〉というものであるが、後者にはやはり「皆は逃げ出すでしょう」という表現があり、この水にも薬物が混入されていたと考えられないだろうか。

（2）饗宴で語られた話題に関するもの

A. 饗宴の場で最も多く語られた話題は、下ネタであったようだ。具体的な素材については述べられていないが、**Athen.1.18d-e**【２】は〈70回も交われる催淫剤〉、**Athen.1.18d-e**【３】は〈鳥のように衝動を覚える催淫剤〉について語っている。一方 ***Suppl.Mag.*83**【２】は〈ルッコラの種とマツの実〉に、***Suppl.Mag.*76**【６】は〈セロリとルッコラの種〉に催淫効果があると述べ、**Athen.2.57c** は直接、催淫効果に触れていないが、〈マツの実は栄養豊富〉であると述べている。ルッコラの種とセロリについては調べが付かなかったが、確かにマツの実には強壮作用があることが知られているので[86]、全くのデタラメとは思われない。また塗り薬として、***Suppl. Mag.*83**【１】は〈ツバメの糞とハチミツ〉を、***Suppl.Mag.*76**【３】は〈毒ニンジンの汁〉を、男性器に塗布するよう勧めているが、これらが効いたかどうかは分からない。また **Athen.1.18d-e**【１】は、性交の回数を増やす体位として〈スポンジを敷く方法〉を、***Suppl.Mag.*76**【２】は〈浴場においてパートナーを見つける〉という縁起担ぎのようなものを紹介している。また **Psell.**【９】〈ある少女が処女であるかどうかを調べる方法〉はゲスの極みである。「亜炭石」は γαγάτης λίθος（lignite stone）の訳で[87]、lignite は「亜炭、褐炭」である[88]。亜炭は「木材が変化してできた石炭のうちではもっとも石炭化の進まない石炭」であり、「石炭分類上、褐炭に含まれ」、「亜炭より石炭化の進まないものを褐炭というときもある」、「炭素含有量では66～70％程度」、「発熱量は１㌔グラム当り3000～4000㌔カロリー程度」で、「水分、灰分を多く含み」、「良質の燃料とはならない」とある[89]。したがって亜炭を燃やすと大量の煙と臭いが発生しただろう。以上の内容から、これらの話題は、精力が減退しつつある中高年男性に好まれたものと推測される。逆に、制淫剤についても述べられており、**Athen.2.69e-f** は〈レタス〉、***Suppl.Mag.*76**【１】〈シビレエイの脳〉の効果をうたっている。

B. 妻に対する悪口もその背景に中高年男性の存在を暗示する。***Cyr.*2.31.24–26,**

p.164は〈妻の放屁が止まらなくする方法〉、**Psell.**【13】は〈鏡に映った妻の顔がロバの顔に見える方法〉である。これらは全くの笑い話である。

C. 迷信のようなものとして、***Cyr.*2.31.20–21, p.164**は〈ロバの皮の上で寝ると悪夢を見ない〉というものもある。

D. 長旅をしても喉が渇かない有用な植物についての記述もいくつかある。**Psell.**【6】は〈ヨモギ〉、**Athen.2.58f** は〈ゼニアオイ〉、**Athen.2.69f** は〈レタスの茎〉である。これらの植物の中で、すくなくとも「ヨモギ」については説明がつく。「ヨモギ」は ἀρτεμισία（wormwood）の訳であり[90]、wormwood は「［植物］ヨモギ《キク科ヨモギ属（Artemisia）の草本の総称；臭気の強いものが多い》」である[91]。「ヨモギ」の学名は Artemisia で、キク科ヨモギ属の総称であり、約250種ほどが世界に広く分布し、ビタミンやカルシウムに富み、強壮剤になる[92]。ちなみに wormwood は「ニガモヨギ」とも訳されるが[93]、その学名は Artemisia absinthium であり、キク科の多年草で、ヨーロッパ原産、アプシンテンなどの苦味成分を含み、健胃薬に用いる他、ワインに浸して飲むと酔わないとされ、茎の長さは１m 程になる[94]。つまり「ヨモギ」の下部分類が「ニガヨモギ」ということになるが、原文ではそこまで厳密に書かれていない。いずれにせよ、徒歩での長旅に際して、ヨモギを食べることは理にかなっていると言えよう。

（３）饗宴のマナーに関するもの

A. 酒も度を越すと眠くなる。**Psell.**【10】〈眠ってはいけない時〉。「炭酸ナトリウム」は νίτρον の訳である[95]。「炭酸ナトリウム」は、炭酸のナトリウム塩のことであり、俗には炭酸ソーダ（あるいは単にソーダ）と呼ばれ、白色の粉末で、天然ソーダは炭酸ナトリウムを多く含む塩湖の周辺に結晶となって堆積し、古代からガラス、石鹸の原料とされた[96]。「硫酸銅」は χάλκανθον（solution of blue vitriol (copper sulphate), used for ink and for shoemaker’s blacking「硫酸銅の溶液、インクや靴職人の靴墨に使われた」）の訳である[97]。硫酸銅（Ⅰ）は「無色あるいは灰色の粉末」で、硫酸銅（II）の「無水和物は無色の粉末」、「五水和物は」「青色の結晶」で、「濃青色」の「顔料」となる[98]。そして、炭酸ナトリウム水溶液と硫酸銅水溶液を混ぜると「孔雀石」が生成される。「孔雀石」は、「銅のもっとも普通の二次鉱物」であり、「炭酸塩を脈石とする鉱床の酸化帯中に産し」、「良質のものは巌絵の具として用いられ」、「名の由来は、くじゃく石の美しい緑色の外観と、層状をなして産する断層面がクジャクの羽に類似していることによる」[99]。眠気を覚ますのだから、激しい匂いがしそうなものであるが、匂いに関する記述がなく、結局は分からなかった。逆に ***Cyr.*3.13.5–9, p.204**〈饗宴の客を眠らせる〉は、早く饗宴をお開きにして家に帰りたい時に密かに使う手口ということであろうが、その効果は分からない。

B. 喧嘩を起こす。***Suppl.Mag.*76**【４】と **Ail.*NA*.1.38**は全く同じ内容で、〈饗宴

の場に犬が噛んだ石を投げ入れると喧嘩が起こる〉というものである。犬は吠えるように口論する人間の類感だろう。

C. 酒に酔わない方法。**Athen.2.52d-e** は〈饗宴の前に苦アーモンドを食べると酒に酔わない〉というもので、アーモンドには様々な栄養価があり、酒のつまみにはなるが、酒に酔わない効果については見出すことが出来なかった。

D.『キュラニデス』には、酩酊に関する互いによく似た文章が三つある。***Cyr*.1.1.140–141, p.30**、***Cyr*.1.1.161–169, p.31**、***Cyr*.1.8.13–17, p.58**の全体的な内容は、〈ワインを作るブドウの樹を讃え、酒杯に向かって呪文を唱え、それをワインの壺に入れて、そのワインを飲み分けると、皆がまるで魂が抜けたかのようなリラックス状態になる〉というもので、単なる酩酊以上の忘我状態を示唆しているように思われる。全く証拠はないが、その酒杯には何らかの薬物が入っていたのではないだろうか。***Suppl.Mag*.91**は〈饗宴において〉という単語が読めるだけで、内容は断片すぎて不明である。

４．おわりに

以上の考察から、「パイグニア」は多くのデタラメを含みながらも、全くのデタラメではなく、化学的根拠によって説明のつくものも少なくないことが分かった。プリニウスは『博物誌』において、魔術の偽善を批判して、魔術の本質を次のように発展論的に述べている。〈魔術は、①「医術」medicina から起こり、②「宗教の力」vires religionis を付け加え、③「占星術」artes mathematicas も付け加えることによって、今日でもなお人類の大部分を三重に縛り付けて支配している（30.1-2)〉[100]。「宗教」より「医術」が先にある点が興味深い。つまり魔術師はまず、実際に化学的効果のある薬物を利用して人々の目の前で奇跡を起こし（つまり病気を治し)、やがてその効果に宗教的粉飾と解釈を加えることにより、あるいはその効果を純粋な仕掛けやトリックで起こすことにより（例えば、アボヌテイコスのアレクサンドロスのように)[101]、自分および自分が操る神霊の力を信じ込ませ、自分とその神霊に対する権威を創出したという批判である。その権威はやがて権力と結びつく可能性を孕んでいる。この発展論的な尺度に照らし合わせると、「パイグニア」は①と②の間に位置しているように思われる。「パイグニア」には、現代的な観点からすれば、いかがわしいものが多いが、鉱物、植物、動物が持つ医術的・化学的な効用を利用したものも多く、②の重要な要素である呪文を伴うものは稀にしかない。『ギリシア語魔術パピルス』の大多数が②や③に属することと比較すれば、「パイグニア」は魔術の原初的な形態の名残りを示していると言えるのではないだろうか。ただし「パイグニア」は古代の医術そのものではなく、古代の医術が持つ化学的な知識の残存を利用したプロの芸人による「見世物」ないしは「語り」であり、饗宴におい

て上演された「エンターテイメント」であったとみなすべきものであろう。

参考文献

アイリアノス『動物奇譚集』：中務哲郎訳、西洋古典叢書、１～２巻［2017］。

アテナイオス『食卓の賢人たち』:柳沼重剛訳、西洋古典叢書、１巻［1997］、３巻［2000］。

『イソップ寓話集』：山本光雄訳、岩波文庫［1974改版］。

『ウィズダム英和辞典』：井上永幸／赤野一郎編、第２版、三省堂［2008］、Dictionary for iPhone / iPad 4.6.5。

『オックスフォード動物行動学事典』：デイヴィド マクファーランド編、木村武二監訳、どうぶつ社［1993／原書1987］。

『独和辞典』：冨山芳正編集主幹、第２版、郁文堂［1993］。

『ギリシャ語辞典』：古川晴風編著、大学書林［1989］。

篠原功治［2004］：『親子で楽しむびっくり科学手品55』祥伝社［2004］。

『大日本百科事典』：小学館、第２版［1974］。

『日本大百科全書』：小学館、第２版［1994］。

『新英和大辞典』小稲義男編者代表、第５版、研究者［1980］。

『新英和大辞典』竹林滋編者代表、第６版、研究社［2002］。

『新英和中辞典』：岩崎民平／小稲義男監修、第４版、研究社［1977］。

『新分類 牧野日本植物図鑑』：牧野富太郎、北隆館［2017］。

『図説 花と樹の大事典』：木村陽二郎監修、柏書房［1996］。

『プリニウスの博物誌』：中野定雄／中野里美／中野美代訳、雄山閣 I ～ III 巻［1986］。

プラトン『法律（上)』：森進一／池田美恵／加来彰俊訳、岩波文庫［1993］。

プラトン『法律（下)』：森進一／池田美恵／加来彰俊訳、岩波文庫［1993］。

前野弘志［2018］：「ある魔術師のサクセスストーリー　ールキアノス『偽預言者アレクサンドロス』ー」『広島大学大学院文学研究科論集』78巻、15-40頁。

前野弘志［2020］：「『ギリシア語魔術パピルス』にみる魔術師たちの自画像」『史学研究』305、22-50頁。

山﨑昶［1988］：『これはびっくり！　化学マジック・タネ明かしースーパーマーケット・ケミストリー』Blue Backs、講談社。

『羅和辞典』：水谷智洋編、改訂版、研究社［2009］。

Athenaeus The Deipnosophists:C. B. Gulick (tr.), *Athenaeus The Deipnosophists,* Loeb Classical Library, vol.1 [1927], Charles Burton Gulick, *Athenaeus The Deipnosophists*, Loeb Classical Library, vol.III [1929]。

Attilio Mastrocinque [2003]: Dinners with the Magus, *MHNH Revista Internacional de Investigación sobre Magia y Astrologia Antiguas*, 3, p.75–94。

Attilio Mastrocinque [2017]: *The Mysteries of Mithras : A Different Account*, Mohr Siebeck,

Tübingen。

David Bain [1998]:Salpe's ΠΑΙΓΝΙΑ: Athenaeus 322 A and Plin. H. N. 28.38, *The Classical Quarterly*, 48–1, [1998], p.262–268。

Die Kyraniden:Dimistris Kaimakis (Hrsg.), *Die Kyraniden*, Verlag Anton Hain, Meisenheim am Glan, [1976]。

DKP = *Der Kleine Payly*, [1975]。

DNP : *Der Neue Pauly*, [1996–2008]。

GMP = Hans Dieter Betz (ed.), *The Greek Magical Papyri in Translation including the Demotic Spells*, 2nd Edition [[1]1986, [2]1992]。

Jacco Dieleman [2019]:The Greco-Egyptian Magical Papyri, D. Frankfurter (ed.), *Guide to the Study of Ancient Magic*, Brill, Leiden / Boston, p.283–321。

J. M. Duffy (ed.) [1992] : *Philosophica Minora* I, Stuttgart / Leipzig, [1992], Michael Psellus, p.32, 65–90。

James. N. Davidson [1995] : 'Don't try this at home: Pliny's Salpe, Salpe's Paignia and magic', *The Classical Quarterly* n.s.45, p.590–592。

Liddell & Scott[9] [1996] : *A Greek-English Lexison*, 9th Edition, Supplement。

Max Wellmann [1928] : Die ΦΥΣΙΚΑ des Bolos Demokritos und der Magier Anaxilaos aus Larissa, Teil I, *Abhandlungen der preussischen Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-historische Klasse*, Nr.7, Berlin。

OCD[3] [1996] : *The Oxford Classical Dictionary*, 3rd Edition [1996]。

OCD[4] [2012] : *The Oxford Classical Dictionary*, 4th Edition [2012]。

PECS [1976]:Richard Stillwell (ed.), *The Princeton Encyclopedia of Classical Sites, Princeton*, New Jersey, Princeton University Press。

Plat. *Leges* : Ioannes Burnet, *Platonis Opera*, Tomus V, *Leges*, Oxford Classical Texts, [1907]。

Pliny Natural History, vol.VIII : W. H. S. Jones, *Pliny Natural History*, vol.VIII, Loeb Classical Library, [1963]。

Pliny Natural History, vol.IX : H. Rackham, *Pliny Natural History*, vol.IX, Loeb Classical Library, [1952]。

PGM : Karl Preisendanz (Hrsg.), *Papyri Graecae Magicae: Die Griechischen Zauberpapyri*, Bd.I [[1]1928, [2]1973], Bd.II [[1]1931, [2]1974], (Bd.III [1941])。

RE : *Real-Encyclopädie der klassischen Altertumswissenschaften*, [1893–1980]。

Suppl.Mag. : Robert W. Daniel / Franco Maltomini (ed. tr. not.), *Supplementum Magicum*, Westdeutscher Verlag, Opladen, vol.I [1990], vol.II [1991]。

註

(1)　『ギリシャ語辞典』、παίγνιον、816頁。

(2)　VII.803c の日本語訳はプラトン『法律（下）』57-58頁、原文は Plat. *Leges*, p.232、I.644d の日本語訳はプラトン『法律（上）』72頁、原文は Plat. *Leges*, p.40を参照した。

(3)　*RE*, Bd.XVIII.2 [1942], παίγνιον, K. 2396-2397、David Bain [1998] p.264。一方この語が文学的専門用語ではなかったとも言われている（*OCD*[3] [1996], paignion, p.1092）。

(4)　『独和辞典』、Scherz、1264頁。

(5)　『新英和中辞典』、gimmick、649頁。

(6)　Jacco Dieleman [2019] p.283-321、特に p.304。

(7)　以上、『魔術補遺』の解説は、*Suppl.Mag*. vol.I, ix; Jacco Dielemann [2019] p.287より。

(8)　Bain [1998] p.263。

(9)　「腰」は、性欲の宿る座と信じられ「ペニス」を指す（*Suppl.Mag*. vol.I, p.144）。

(10)　「浴場」は、覗きや露出狂が出没する場であり、少年や少女を誘う場であった（*Suppl. Mag*. vol.I, p.144）。

(11)　*Suppl.Mag*. の訳は To turn cheap wine sour:「安いワインを酸っぱくすること」（vol.I, p.143）。

(12)　*OCD*[4] [2012], Psellus, Michael, p.1232 ; *RE*, Suppl.XI, [1968], Psellos, K.1124-1182。

(13)　『異聞』の要約は David Bain [1998] p.263;Attilio Mastrocinque [2017] p.273, n.54にあり、原文は Wellmann [1928] S.79-80に依拠した。cf. J. M. Duffy [1992]。

(14)　David Bain [1998] p.263, n.7; Attilio Mastrocinque [2003] p.82; Attilio Mastrocinque [2017] p.273。

(15)　前野弘志［2020］33頁。40頁の「（40）ユリウス・アフリカヌス→（12）を参照」は、「（15）を参照」の誤り。

(16)　ラリッサはテッサリア地方のペネイオス（ペネウス）河畔の都市（*PECS* [1976], LARISSA or Larisa or Pelasgis, p.485）。

(17)　Euseb.*Chron*. (Hier.), Schöne, II, p.141（Wellmann [1928] S.52, Anm.1）。ヒエロニムス（生没年：347年 -419年）は、ダルマティア地方のストリドン出身で、アウグスティヌスに並ぶ多作なラテン語のキリスト教作家で、カイサリア出身のキリスト教作家エウセビオス（生没年：260年より少し後～337-340年の間）の失われたギリシア語の『年代記』を378年より後にラテン語に翻訳した（*DNP, Suppl.2, Geschichte der antiken Texte, Autoren- und Werklexikon,* [2007], Hieronymus, Sophronius Eusebios, S.284-288; Eusebios [7] von Kaisareia (Euseb), S.242-247）。

(18)　以上、アナクシラオスについて、Max Wellmann [1928] S.52, Anm.1（原文）；*RE*, Bd.I.2, [1958], Anaxilaos, 5) Aus Larissa, K.2084 [M. Wellmann]; David Bain [1998] p.266; Attillio Mastrocinque [2003] p.90; Attilio Mastrocinque [2017] p.273。

(19)　David Bain [1998] p.263。

（20） 以上、プリニウスと『博物誌』について、『プリニウスの博物誌』３巻1544-1548頁より。

（21） 以下の訳は、『プリニウスの博物誌』を参考にしたが、前野による。原文は *Pliny Natural History*, vol.VIII ; *Pliny Natural History*, vol.IX による。

（22） *OCD*[3] [1996], Cyranides, p.421。

（23） この書物の起源をシリアあるいはバビロニアとする説（Attilio Mastrocinque [2003] p.80; Attilio Mastrocinque [2017] p.271）、あるいはアレクサンドリアとする説（Attilio Mastrocinque [2017], p.271, n.39）もある。

（24） *OCD*[3] [1996], Cyranides, p.421。

（25） 以上、『キュラニデス』の解説について、*Die Kyraniden*, S.1-4より。

（26） これら「パイグニア」の要約は、David Bain [1998] p.263-264; Attilio Mastrocinque [2003] p.80-82; Attilio Mastrocinque [2017] p.271-273にある。

（27） 原文は ὄρφὸν。*ophros*（Attilio Mastrocinque [2017] p.272）は誤植だろう。

（28） 「ゲロー」は吸血鬼あるいは小鬼、幼児を拐うとされる（Liddell & Scott[9], Γέλλω, p.342）。

（29） この溶液は、蛍光塗料のようなものだろうか。

（30） 以上、アイリアノスと『動物奇譚集』の解説について、アイリアノス『動物奇譚集』２巻［2017］357-362頁より。同書を史料を読む上で参考にしたが、史料の訳は筆者による。原文は Perseus より。

（31） *RE*, III-1, [1970], Bolos, 3) Bolos aus Mendes in Ägypten, K.676 (M. Wellmann)。

（32） 要約は、Attilio Mastrocinque [2003] p.81にある。

（33） 以上、アテナイオスと『食卓の賢人たち』について、アテナイオス『食卓の賢人たち』１巻、解説432-441頁より。

（34） 以下の訳は、『食卓の賢人たち』を参考にしたが、前野による。原文は *Athenaeus The Deipnosophists*, vol.I ; *Athenaeus The Deipnosophists* vol.III による。

（35） 『食卓の賢人たち』１巻65頁、註（5）

（36） 『食卓の賢人たち』１巻187頁、註（2）。

（37） ὀητινῶδες という単語は辞典にない。

（38） 『食卓の賢人たち』１巻208頁。Gulick は、この文章な「栄養失調と喉の渇きのための悪戯の療法」A joke-remedy for malnutrition and thirst というの註釈を付けているので（*Athenaeus The Deipnosophists*, vol.1, [1927], p.255, g）、彼はこれを「パイグニオン」と見なしていることが推測される。

（39） この史料から『パイグニア』と題する書物は複数存在したことが分かるが、サルペについては詳しい研究がある。多色の魚の名に由来するサルペという珍しい名前の女性は二人知られており、一人はプリニウス『博物誌』に５回言及される（28.38, 66, 82, 262, 32.135）助産婦であり、もう一人はアテナイオス『食卓の賢人たち』に１回言及される（322a）レスボス島出身の『パイグニア』作家である。両者を同一

人物と見なすDavidsonの説（James N. Davidson [1995] p.590-592）を批判的に検証したBainは、助産婦のサルペが「（脱毛して）少年たちの見栄えをよくした」というプリニウスの一文（32.135）に着目し、奴隷は売買される前に健康診断される習慣があったことから、この文章には彼女が奴隷売買に関与したことが示唆されており、医者と同様に助産婦も奴隷の健康診断のために呼ばれたと推測する。また『キュラニデス』においてサルペ魚は常に催淫との関係で言及されることから、その魚の名がセックスに関するレシピを編集した助産婦に適合すると結論する（以上、サルペについて、David Bain [1998] p.262, 267-268より）。

(40) 例えば、山﨑昶［1988］77-82頁。

(41) 『日本大百科全書』７巻、クミン、558頁。

(42) 『ギリシャ語辞典』、κηκίς、615頁。

(43) 『大日本百科事典』17巻、ムラサキガイ［紫貝］、341頁。

(44) *DNP*, Bd.10, [2001], Purpur, K.604。

(45) 『ギリシャ語辞典』、πορφύρα、916頁；『羅和辞典』、purpura、535頁；『羅和辞典』、murex、406頁。

(46) 上掲の辞典には、これらの貝から「紫の染料（貝紫）」が採れるとは書かれていないが、プリニウスは「貝紫」が採れる貝は２種類あり、「ホラガイ」bucinaと「アクキガイ」purpuraであると述べている（Plin. *HN*. 9.130）。「貝紫」が採れる貝の生態と染料工程については、アリストテレス『動物誌』とプリニウス『博物誌』が詳しく述べている。

(47) 『ギリシャ語辞典』、ψιμίθιον→ψιμύθιον→ψι(μ)μύθιον、1217頁。

(48) 『日本大百科全書』３巻、鉛白、777頁。

(49) 『ギリシャ語辞典』、τρύμη、1111頁。

(50) 『イソップ寓話集』36頁。

(51) 『ギリシャ語辞典』、στυπτηρία、1022頁。

(52) 『日本大百科全書』22巻、ミョウバン、498-499頁。

(53) 「卵」は、あらゆる家禽（カモ・アヒル、キジ、ガチョウ、鶏、クジャク、ウズラ、ハト）から取り、また野生の鳥からも取ったが、一般的に「卵」といえば「鶏卵」を指し、高く評価され、お買い得な食べ物であった（*DNP*, Bd.3, [1997], Ei, K.903-904）。

(54) 以上、「擬死」については、『オックスフォード動物行動学事典』、擬死、158-159頁より。

(55) 以上、「催眠」については、『オックスフォード動物行動学事典』、催眠、312-318頁より。

(56) Liddell & Scott[9], λινόσπερμον, p.1051。

(57) 『図説 花と樹の大事典』、アマ［亜麻］、35-36頁。

(58) Liddell & Scott[9], ἀρτότυρος, p.250; καθαρμός, p.850。

(59) 『ギリシャ語辞典』、ἀδίαντος、16頁。
(60) Liddell & Scott[9], ἀδίαντος, p.22。
(61) 『新英和大辞典』第6版、maidenhair、1491頁。
(62) 『新分類 牧野日本植物図鑑』、ホウライシダ、1286頁。
(63) 『新分類 牧野日本植物図鑑』、クジャクシダ、1287頁。同書はクジャクシダを〔イノモトソウ科〕とするが（1287頁）、『図説 花と樹の大事典』、クジャクシダ［孔雀羊歯］は〔ウラボシ科〕とする（151頁）。
(64) 『日本大百科全書』１巻、アジアンタム、280-281頁。
(65) 『新分類 牧野日本植物図鑑』、ホウライシダ、1286頁；クジャクシダ、1287頁。
(66) 『日本大百科全書』19巻、はんだ、313頁。
(67) Liddell & Scott[9], ὕλη, p.1847-1848。
(68) 「ウッド合金」については、篠原功治［2004］68-69頁より。
(69) 『ギリシャ語辞典』、στρόβιλος、1020頁。
(70) Liddell & Scott[9], στρόβιλος, p.1655。
(71) 『ギリシャ語辞典』、κοχλίας、638頁。
(72) 『ギリシャ語辞典』、κόχλος、638頁。
(73) 『ギリシャ語辞典』、κῆρυξ、617頁。
(74) Liddell & Scott[9], λιθάργυρος, p.1048。
(75) 『新英和中辞典』、litharge、895頁。
(76) 『新英和大辞典』第５版、1204頁。
(77) 『日本大百科全書』10巻、酸化鉛、348頁。
(78) 『日本大百科全書』３巻、鉛丹、765頁。
(79) 『日本大百科全書』４巻、貝類、750頁。
(80) 山崎昶［1988］34頁。
(81) 『ギリシャ語辞典』、σανδαράχη、987頁。
(82) 『ギリシャ語辞典』、θεῖον、518頁。
(83) 『日本大百科全書』２巻、硫黄、34頁。
(84) Liddell & Scott[9], Αἰθίοψ, (Ethiopian, negro), p.37。
(85) 以上、パイグニアとミトラ教の関係について、Attilio Mastrocinque [2003] p.83-91;Attilio Mastrocinque [2017] p.265-284より。
(86) 『大日本百科事典』、マツ、717頁。
(87) Liddell & Scott[9], Γαγάτης, p.335。
(88) 『新英和中辞典』、lignite、887頁。
(89) 『日本大百科全書』１巻、亜炭、367頁。
(90) Liddell & Scott[9], ἀρτεμισία, p.248。
(91) 『新英和大辞典』第５版、wormwood、2445頁。

(92) 『日本大百科全書』23巻、ヨモギ、640-641頁。
(93) 『ウィズダム英和辞典』、wormwood。
(94) 『図説 花と樹の大事典』、ニガモヨギ［苦艾］、326頁。
(95) 『ギリシャ語辞典』、νίτρον、753頁 →λίτρον、676頁。
(96) 『日本大百科全書』15巻、炭酸ナトリウム、44頁。
(97) Liddell & Scott[9]、χάλκανθον、p.1972。
(98) 『日本大百科全書』24巻、硫酸銅、115-116頁。
(99) 『日本大百科全書』 7巻、くじゃく石、415頁。
(100) 『プリニウスの博物誌』III 巻、1242頁の要約。
(101) 彼のトリックについては、前野弘志［2018］。

（広島大学大学院人間社会科学研究科）